

第三章 三世紀の盲点

それは「島」だった！——津軽海峡の論証

津軽海峡の出現

はじめて姿を現わした津軽海峡。それは実に十一世紀に成立した『新唐書』です。宋代の宋祁（そうき一〇六一没）の著作ですが、その日本伝に次の記事があります。

「(子天智立つ)。明年、使者、蝦夷(えみし)人と与(とも)に朝を偕(とも)にす。蝦夷も亦(また)海島*の中に居る。其の使者、須(ひかり)の長さ四尺許(ばかり)り。箭(や)を首に珥(さしほ)さむ。人をして瓠(ひさご)を載(の)せて数十歩に立た令(し)め、射て中(あた)らざる無し」(新唐書日本伝)

島*は、鳥の下に山。島の異体字。JIS 第4水準ユニコード 3800

ここで蝦夷人の住むという、「海[鳥]山」が、九州島でないことは、明らかです。おそらく北海道島を指すものでしょう。ここで「おそらく」と言ったのは、この「海[鳥]山」が本州を指す可能性もあるからです。この『新唐書』の描く日本列島内の世界。それを冷静に見つめてみましょう。

「日本は古の倭奴なり。京師を去る万四千里。直(ただ)に新羅の東南。海中の島*に在りて居す。其の王、姓は阿每(あまい)氏。自ら言う。『初めの主、天の御中主(みなかぬし)と号す。彦瀲(ひこなぎさ)に至る、凡(おおよ)そ三十二世。皆、尊を以て号と為し、筑紫城に居す。彦瀲の子、神武立ち、更に以て天智を以て号と為す。徒(うつ)りて大和州に治す』」(新唐書日本伝冒頭)

ここには、近畿天皇家による、古事記・日本書紀流の歴史観が“はめこまれている”ことは確かです。確かですが、その背景をなす地理観、それは、最初の「倭奴」、その住んでいた「海中の島*」が「筑紫城」の地であったこと。のちに本州の中の「大和州」に移ったこと。それらをしめしています。

そしてその本州の中の東北方に、問題の「蝦夷人の国」があったのです。この国は津軽海峡を中心に、東北地方と北海道にまたがって存在していた、“北方の海峡国家”であった可能性が高い、と思われます。ともあれ、蝦夷国の国使が中国と国交を結んだ以上、その神聖なる母領域たる津軽海峡が、中国側の目の中に映じてきたことは、確実です。

光の中の海島

はじめて明確に津軽海峡が現われてくる中国の正史。それは実に元の脱脱（一三五五没）の著わした『宋史』です。

「(雍熙ようき元年〔九八四〕、日本国の僧、[大周]然(ちやうねん) 国の東境は海島に接し、夷人(いじん)の居る所なり。身面皆毛有り。東の奥洲は黄金を産し、西の列島は白銀を出(い)だし、以て貢賦と為す」(宋史日本伝)

[大周]然(ちやうねん)の[大周]は、大の下に周。JIS 第3水準ユニコード 595D

ここに出てくる「海島」が北海道島であることは、自明です。何しろ「奥洲」が出た上で、「国の東境」というのですから。ただ、この段階でも、「北海道島は日本国内と考えられていない」ことが注目されます。それは「蝦夷国」の島だったのです。

もちろん、ここでも「津軽海峡」という名前ではありませんが、レッキとしたその実体が、中国史書という、東アジアの中心的な歴史の明るみに登場しているのです。

日本の史書

中国史書から一転して日本史書に目を向けましょう。『古事記』『日本書紀』です。

まず、『古事記』。ここでは津軽海峡は全く出現しません。『古事記』の世界は、この海峡には“いまだ到着していない”のです。次に『日本書紀』。ここでも、七世紀前半までは全く無し。西方の記事が多いのとは、きわだった対照をなしています。初めて出現するのは、『斉明紀』です。

「仍（なお）、柵養（きかう）の蝦夷（えみし）九人、津刈の蝦夷六人に、冠各二階を授く」（斉明元年七月）

<引用者：斉明元年は655年>

「仍（よ）りて恩荷に授くるに、小乙上を以（もつ）てして、淳代（ぬしろ）・津軽、二郡の郡領に定む。遂に有間浜に、渡嶋（わたりのしま）の蝦夷等を聚（つど）えて、大きに饗（あえ）たまいて帰らしむ」（斉明四年四月）

右の「渡嶋」について、北海道島であるという説と、そうでない、という説とがあるようですが、いずれにせよ、蝦夷との交渉と共に、津軽海峡の存在もまた、近畿天皇家の限前に、公然とその姿を現わしてきたことは、疑うことができません。

見ざる蝦夷国

以上のように中国史書と日本史書を俯瞰（ふかん）してみると、津軽海峡の存在が中国や日本の公的記録に姿を現わしたのが、意外におそいの、一驚されたことでしょう。

盲点は、どこにあったのでしょうか。それは——「蝦夷国」そのものです。この海峡は、この国にとっては、まさに神聖な“母なる海峡”だったのです。そしてこの国は、近畿天皇家から絶えざる圧迫をうけつづけていた国、いわば近畿天皇家にとっては“年来の敵対国”だったのです。ですから、この蝦夷国との交渉を抜きにして“たやすげに”津軽海峡が登場するはずはない。これは歴史の実体、そしてその道理だったのです。

わたしは先へのべた『倭人も太平洋を渡った』の本を訳していたとき、次のような一節にぶつかったのを思い出します。「二つの地点間で交流が容易かどうかは、必ずしもその“距離”に比例するものではない。二点間に介在する部族が友好的であるか、それとも敵対的であるかが問題だ。その点、陸とちがってさえぎるものがない大洋では、二点間に敵対的な人間が存在することがない。いわば“好適な回廊”なのだ」（「“伝播でんば”か、それとも“独立発達”か——ここから論争がはじまった」スティーブン・C・ジェット）。

この点、敵対者の海岸線は、いわば敵対者側の「領海」なのです。

にもかかわらず、わたしたちは子供のときから教科書で日本を、あたかも一民族国家であるかのように教えられてきました。テレビや雑誌でも、いわゆるがそう公言してはばかりありません。そのため、古墳時代以後という、古代史上ではごく新しい段階をとってみても、この日本列島は蝦夷国や流求国、それに倭国、日本国などから成る多元的な国家の複合列島だった、この事実から、いつも目をそらしつづけてきたのです。

蝸牛かたつむりの争い

このように“真実から目をそらす”人間の態度は、必然的に“認識のくもり”を生みます。わたしたちは、「津軽海峡など、はじめからみんなに分っていた」。こんな気分でしたために、倭人伝冒頭の「山島」の一句を、今まで意にも介せずきたのではないのでしょうか。——わたし自身をふくめて。

思えば、近畿か九州かと競（きそ）いあった「邪馬台国」論争も、そのようなわたしたちの“おごり”の上に立った蝸牛（かたつむり）の角（つの）の上の争い（莊子に出てくる寓話ぐうわ。大局を忘れ、小事を争うこと）にすぎなかった。後世からそのように言われるかもしれません。